(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名　任明信

東アジアの20世紀とは、あるいは日本のように帝国主義的国家形成から敗戦・被占領を経て民主的国家への再生、あるいは中国のように半植民地状況から人民共和国の建国、あるいは台湾のように植民地および軍事独裁の歴史を経て民主的共和国建設の実現、あるいは香港あるいはシンガポール‥‥というように多様な経験から成り立っている。近代中国の文豪魯迅（1881―1936）は、中国本国ばかりでなく戦前戦後を通じてこのような東アジアを生きる人々によっても読み継がれてきたのである。

さて韓国のばあいは、大韓帝国体制による近代化の試み（1897～1910）、日本植民地体制下での苦難の近代化、戦後の南北分断と大韓民国の成立（1948）、50年代の朝鮮戦争（1950～53）、60年代以後の軍事独裁体制、そして80年代末の民主化成就という激動の歴史を歩んできた。植民地体制下で「国民国家の達成」を熱望していた韓国知識人は、半植民地体制下の中国で同様の夢を抱き知的格闘を続けた魯迅に対し熱い共感を寄せ、「魯迅読みの韓国的伝統」を築いていた。

本論文は1910年代末から独立に至る近代韓国における魯迅の受容とその文学的再生産の様相を探るものであり、近代韓国における魯迅の読書史に関する研究である。第一部第一章では近代韓国における活字メディアの発展史を、第二章では丁来東、申彦俊、李陸史という著名な知識人を軸として魯迅文学の受容史をそれぞれ概観し、魯迅文学の受容と再生産の前提となる公共圏の形成状況を描いている。第二部第一章では植民地期最大の作家であった李光洙（1892～？、朝鮮戦争中に行方不明）における阿Q像の受容と変容を、第二章では1940年芥川賞候補にもなった金史良（1914～50）文学における阿Q像の変容と深化とを論じている。本論文の主な成果は次の通りである。

（1）金時俊、朴宰雨、全炯俊ら韓国人研究者および今村与志雄ら日本人研究者による韓国における魯迅受容に関する先行研究を総合しつつ、韓国の活字メディアと文学との発展史における魯迅受容史・変容史の展開を位置づけた。このような韓国精神史における魯迅イメージの研究は斬新な視点にして方法であり、新しい魯迅研究の端緒を切り開くものである。近代韓国精神史の考察対象に在日コリアン作家を含める視点も新鮮であった。

（2）韓国人同胞に対し啓蒙者としての使命感、「教師意識」を抱き続けていた李光洙が、30年代後半の総督府による弾圧を契機にして作品傾向に大きな変化を生じた際に、魯迅からの影響下で、植民地民衆の中に「阿Q」を見いだし、「朝鮮の阿鬼」として短編「万爺の死」（1936）を執筆し、「阿Q的知識人」としての自画像を構想していく過程を詳細に論じた。

（3）植民地時代末期に二重言語作家として日韓両国語いずれを問わず虐げられた同胞の現実と苦悩する韓国知識人の内面世界を描き続けた金史良が短編「天馬」（1940）で描いた性格破綻者の文学者に濃厚な阿Qの影が投じられている点を指摘し、さらに金史良の短編「Q伯爵」（1941）の主人公が1930年代以来韓国知識人の間で文学的記号として流通していた阿Qから「余計者的植民地知識人像」として再生されたものである点を論証した。Q伯爵は日本皇室から爵位を授かった植民地地方長官の父に反発して、アナーキストを自称し思想犯として捕まることを願い愚行を繰り返しては留置場の常連となり、時に経済難民や移民の群れに混じって絶望の満州行き難民列車に乗り込み酔いつぶれ、下層民衆と「同じ方向に向かって走っている感じだけで救われる気持ちになる」とつぶやく。

植民地韓国において阿Qから再生産されたQ伯爵の本論文による発見は、日本による植民地支配の不当性をあらためて深く認識させるものである。また魯迅文学を手がかりにこのような深刻な自己解剖を行い、それを作品化し読書した繊細にして豊穣なる韓国近代精神史の展開には感銘を覚えさせられる。かつてフランスの作家ロマン・ロランは阿Qの運命に涙を流したが、本論文の読者もまた韓国精神史におけるQ伯爵の姿に目頭の熱くなる思いを禁じ得ぬことであろう。

本論文は通俗的な韓国社会像にいささか無批判に依拠している面もあるが、やはり最新の歴史学、社会学などの分野の成果を十分に取り入れたより精緻な読解作業も必要であったろう。望蜀の言ではあるが、韓国における阿Q像以外の魯迅文学受容および魯迅以外の中国作家の受容状況にも目配りが欲しかった。これらは今後の課題であるといえよう。本論文は上記（1）～（3）を中心に顕著な成果をあげており、その内容は博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。